

ムーディ貸本屋に見る 19 世紀イギリスの読者層

續橋 裕子

18 世紀から 19 世紀にかけてのイギリスは、あらゆる面で急成長を遂げた。産業の発展によって暮らしに余裕を与えられた中産階級は、学校教育の発展による識字率の上昇も手伝って、余暇の楽しみの 1 つとして読書をするようになる。しかし、当時の本の値段は高く、裕福な中産階級であっても購入をためらう価格だったため、彼らは買うのではなく読書施設から本を借りて読んでいた。特に中産階級に本を提供していたのが貸本屋であった。多方面からの批判を浴びながらも貸本屋は 18 世紀を通して発展していき、19 世紀に入ると巨大な事業としての貸本屋も登場する。その最たる存在がチャールズ・エドワード・ムーディ (1818 - 1890) によって創られたムーディ貸本屋 (Mudie's Select Library) だった。格安の会費と、それまで批判の主な対象だった通俗小説をコレクションから除外したことなどで人気を得たとされるムーディ貸本屋は、19 世紀を代表する貸本屋である。個人の顧客だけでなく、会員制図書館や地方の貸本屋へのまとまった貸出も行っており、ムーディ貸本屋の本を読んだ人々はかなりの数にのぼると考えられ、イギリスの読者層を考察する上で、その存在を無視することはできない。ムーディ貸本屋についてのこれまでの研究は、英文学の視点から行われたものがほとんどであり、その内容は 19 世紀に隆盛した 3 巻本小説を中心とする小説との関係で貸本屋を捉えたものとなっている。確かに小説は 19 世紀において有力な文学形式ではあったが、ムーディ貸本屋のコレクションには小説以外のノンフィクションも多数含まれており、貸本屋を小説との関係のみで捉えるのは一面的であると言える。本研究では、1860 年、1907 年、1911 年、1931 年にムーディ貸本屋によって刊行された 4 冊の目録を数量的に分析し、まとまったノンフィクションのコレクションが存在したことを客観的に明らかにした。ノンフィクションを主題別に詳しく見ることで、現代の我々にとってそうであるように、当時の中産階級にとっての読書は、娯楽の 1 つというだけでなく、内容も目的も多岐にわたるものだったことを、目録の分析によって明らかにした。また、ムーディ貸本屋が時宜に合ったコレクションを収集していたことが分かった。この事実は、大衆が本というメディアからその時々得るようになっていたことを表わしている。目録から分かることには限界もある。実際にどの本が貸し出されたのかを知る手掛かりにはならず、記載しきれなかった本や複本についても目録だけでは分からない。しかし、貸出記録や、ムーディ貸本屋のコレクションが完全な形では残っていない現状では、目録を通して顧客が実際に利用したであろうコレクションについて考察し、中産階級の人々の読書に迫ろうとした本研究は、イギリスの読書を考える上で十分に意味のある研究だったと考えられる。

(指導教員 原 淳之)